

## ハイデガー芸術論の射程 —「対をなすもの」の問題系から

小林 信之(早稲田大学)

存在と存在するもの、真理と非真理、世界と大地等々、ハイデガーの思考は対をなすものによって支えられているようにみえる。だが、この関係は非対称であり、一方を他方に還元しうるわけでもなければ、図と地のような、前景化と潜在性の関係でもない。このように、対をなすものにむけられた特異な思考の本性に着目し、それと対決することが、ハイデガー解釈において大きな意味をもつように思われる。しかし、とくに芸術をめぐる言説においては、いわばハイデガーによる公式の概念規定に、対をなしてまわりつく分身(double)が重要であり、たとえばデリダも『絵画における真理』において、ハイデガーとシャピロ、対をなすものとしての靴、エルゴンとパレルゴン等の問題系に照準をさだめている。

以上のような展望のもとに、本論の課題をなすのは、ハイデガーが『芸術作品の根源』や『ニーチェ』において切り開いた地平を、とりわけ現代フランスの哲学者による読解を参照しつつ、いまいちど検証してみることである。そのさい主題化されるのが「対」をめぐるテーマであり、照応や相克(Zwietracht)の思考である。つまりハイデガーの言説に畳みこまれた襞の二重性(duplicité)を展開し、芸術をめぐる思考の痕をたどりつつ、その可能性の射程を測ること、そしてデリダらの視点から照らされたハイデガー芸術論のもつ意味を背面から暴き示すことである。

具体的には、美、作品、詩という三つの契機に着目し、その各々に関して、ハイデガーを機縁にくりひろげられた議論を吟味していきたい。

### 美 —無関心性とおぞましき

『ニーチェ』のなかでハイデガーは、美の無関心性というカント的規定に対して、一種の存在論的解釈を試みている。無関心性とは、けっして主観主義的感情の一状態を意味するわけではなく、むしろハイデガーによれば、美への態度は、存在するものをそのままに許容し、自由にあらしめることであるという。つまり関心「なし」とは、同時に存在の恵与(Gunst)に呼応する最高度の努力にほかならないことになる。

他方デリダもまた、純粋な遮断としての関心「なし」について精緻な解釈をくわえているが、ここでむしろ重要なのは、カントが『判断力批判』においてふと漏らした一節のうちに、おぞましき(嘔吐をもよおさせるもの)への感覚の働き、いわば暴力的な反省性ともいうべき働きを見いだしていることであろう(デリダ『エコノミメーシス』)。

### 作品 —エルゴンとパレルゴン

ハイデガーは芸術の本質を真理の作品化にみる。真理がみずからを置きさだめる場所、存在するものにおいて生起する真理の出来事、それが作品であり、その比類ない出来事性は、道具の有用性や使用可能性との対比において語られている。そして有用性を離脱(détacher)させ、

使用外に置くという作品のこの動向が、逆に道具の、さらには存在するもの一般の、存在性格としての *Verlässlichkeit* (信頼性)を現出せしめるというのである。こうした作品解釈に対してデリダは、有用性と無用性という対概念ではなく、むしろエルゴンとパレルゴンの対比に注目する。ここで、さしあたりパレルゴンとは、作品の内部とも外部とも規定しえない中間的なもの、たとえば枠や縁、署名部分などであり、とりわけ作品におけるパレルゴンの構造がみいだされるのは、剥きだしの裸の物に付け加わる残余 (*Rest*) においてである。デリダは、作品内にある作品外的なもの働きに着目しつつハイデガーの言説を解体し、だが同時にたとえばシャピロの素朴な実証科学的言説に汲みつくしえない可能性を開いてみせている。

### 詩 — 根源と無気味なもの

ハイデガーにおいて芸術の本質は詩作(ポイエシス)であり、「ある民族を歴史に刻みこむ」(ラクー=ラバルト『詩の政治』)こととしての神話であったと一般に解されている。だが、忘却された根源を再想起する企てとして、詩と政治の両者は同じ資格で扱われうるのだろうか。たとえばハイデガーのアンティゴネー解釈(『形而上学入門』)にみいだされるテーマのひとつが、国家創設や共同体形成において普遍的にとまなう暴力性であるとすれば、詩とはむしろ、無気味なものへの静かな応答として、起源における原痕跡を(事後的なずれによって)語る運動とみなすことができるのではなかろうか。もちろんその場合も、そうした詩作固有の動性こそが「地上にあって異郷のもの」(トラークル)たる思惟の本性であることを強調するハイデガーの言説に対して、精神の対をなす二重性(*geistig* と *geistlich*)がまわりついてくることを忘れてはならない(デリダ『精神について』)。